

バスク語の自動詞文における能格の出現条件について

福井 夏来

(言語文化学部 スペイン語専攻)

キーワード：バスク語，能格，自動詞

0. はじめに

バスク語¹は能格を用いた文法規範を持つ言語である。King(2012: 356)によれば、通常能格は他動詞の主語に用いられるが、バスク語では自動詞の主語においても能格が現れることがある。そのためバスク語の能格の使い分けには何らかの基準があると考えられるが、その基準を明確に示している研究は管見の限り見当たらない。本稿では、バスク語の自動詞文において能格がどのような条件で現れるかをコーパス調査及びアンケート調査を通して検討し、考察することを目的としている。なお、本文中の例文番号、図表番号、グロス、日本語訳は、特に断りのない限り筆者によるものとする。

1. 先行研究

本稿では紙幅の都合上、本研究とより関わりの深い Hualde and Ortiz(2003)、Alberdi(2003)を取り上げる。Hualde and Ortiz(2003)はバスク語の自動詞文に能格が現れることについて記述しており、Alberdi(2003)はそのような事象が起きる理由に言及している。

1.1. Hualde and Ortiz(2003)

バスク語の文法について網羅的に記述している Hualde and Ortiz(2003)は、バスク語は自動詞述語を用いた文に関して非能格動詞述語と非対格動詞述語という2つの一項述語を区別すると述べている。

(1) a. *Jonek ardoa ekarri du.* (他動詞述語文)

Jon.ERG wine.ABS bring.PFV DU.AUX.ERG:3SG.ABS:3SG

‘Jon brought the wine.’

b. *Jon etorri da.* (非対格動詞述語文)

Jon.ABS come.PFV DA.AUX.ABS:3SG

‘Jon came.’

c. *Jonek saltatu du.* (非能格動詞述語文)

Jon.ERG jump.PFV DU.AUX.ERG:3SG.ABS:3SG

‘Jon jumped.’

¹ バスク語は、スペインとフランスにまたがるバスク地方で主に使用されている、系統不明の言語である。話者人口はおよそ 60 万人で、そのすべてが二言語（多言語）併用者である。(田村 1992: 151 要約)

(1b)と(1c)は共に自動詞を用いた文であるが、主語の格標示と助動詞²が異なっている。
(Hualde and Ortiz 2003: 363-364 要約)

1.2. Alberdi (2003)

Alberdi(2003)は、自動詞の格選択には借用語が関わってくると述べている。自動詞がバスク語に借用された場合、DU 助動詞をとるものと DA 助動詞をとるものに分けられると述べており、その使い分けには意味が関わってくるとしている。すなわち、借用された自動詞が、動作主性を示す動詞 (*dudatu* ‘doubt’, *emigratu* ‘emigrate’) または内部で結果が生じていることを示す動詞 (*funtzionatu* ‘work (as of a machine)’, *zirkulatu* ‘circulate’) である場合に、DU 助動詞と結びつく。

(Alberdi 2003: 44 要約)

1.3. 先行研究のまとめ・問題提起

Hualde and Ortiz(2003)では、バスク語において目的語がない文にも能格が現れたり、自動性が高いと思われる自動詞述語文にも能格が現れたりすることが記述されている。しかし、その出現条件に関しては、非対格動詞と非能格動詞で異なるという記述しかされておらず、深く言及はされていない。また Alberdi(2003)は、借用動詞について、どの助動詞が選択されているか網羅的に調査しており、その出現条件については動詞の意味が関係していると考察している。しかし具体的な用例は十分に挙げられておらず、バスク語固有の自動詞について DU 助動詞が現れることに関して十分な説明がされていない。

本研究における問題の所在は、バスク語の自動詞文に能格が用いられることがあるという点である。この点について明らかにするためには、〈名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞〉の構文について調査する必要があると筆者は考える。

2. 調査

卒業論文では予備調査を2回、アンケート調査を2回行ったが、ここでは紙幅の都合上、本研究の結果により直結する予備調査2およびアンケート調査のみ挙げることにする。

2.1. 予備調査2

ここでは吉田(1992)より、目的語をとらないと考えられる動詞を抽出し、Dowty(1979)の

² バスク語の助動詞は、文中の主語、直接目的語、間接目的語の人称と数に一致し、動詞が自動詞として用いられているか他動詞として用いられているか、また目的語や与格項の有無によって変化する。具体的には NOR、NOR-NORK、NOR-NORI、NOR-NORI-NORK の4つの助動詞を使い分ける(King 2012)が、ここでは便宜上吉田(2001)にならい、これら4つの助動詞をそれぞれ DA 助動詞、DU 助動詞、ZAIIO 助動詞、DIO 助動詞と呼ぶ。

DA 助動詞 (NOR) : 自動詞 *sartzen da. it goes in.*

DU 助動詞 (NOR-NORK) : 他動詞 *sartzen du. he puts it in.*

ZAIIO 助動詞 (NOR-NORI) : 自動詞-与格 *sartzen zaio. it goes into it.*

DIO 助動詞 (NOR-NORI-NORK) : 他動詞-与格 *sartzen dio. he puts it into it.*

動詞分類³に従い4つに分類する。分類した動詞⁴についてそれぞれコーパス⁵調査を行い、動詞が<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文で現れるかどうかを確認する。

コーパス調査の結果、54個の自動詞について<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文が確認された。分類ごとの内訳は以下の表1の通りである。

表1: 予備調査2結果

分類(結果/全体)	動詞
状態動詞(5/101)	<i>baretu</i> 「落ち着く」、 <i>distiratu</i> 「輝く」、 <i>izutu</i> 「おびえる、恐慌をきたす」、 <i>liluratu</i> 「魅力的である」、 <i>sufritu</i> 「苦しむ、悩む」
活動動詞(23/110)	<i>aparkatu</i> 「駐車する」、 <i>bazkaldu</i> 「昼食をとる」、 <i>borrokatu</i> 「闘う」、 <i>dantzatu</i> 「踊る」、 <i>datatu</i> 「日付を記す」、 <i>elikatu</i> 「栄養を摂る」、 <i>erre</i> 「喫煙する」、 <i>eztabaidatu</i> 「議論する」、 <i>frenatu</i> 「ブレーキをかける」、 <i>galgatu</i> 「ブレーキをかける」、 <i>gosaldu</i> 「朝食をとる」、 <i>ibili</i> 「歩く、暮らす」、 <i>jaitsi</i> 「降りる」、 <i>jolastu</i> 「遊ぶ」、 <i>korritu</i> 「走る」、 <i>musukatu</i> 「繰り返しキスをする」、 <i>negoziatu</i> 「交渉する」、 <i>oihukatu</i> 「叫ぶ」、 <i>operatu</i> 「手術する」、 <i>protestatu</i> 「抵抗する、反抗する」、 <i>sinatu</i> 「署名する」、 <i>tartekatu</i> 「介入する」、 <i>zentzatu</i> 「自分を律する」
到達動詞(23/245)	<i>ahitu</i> 「尽きる、疲れ果てる」、 <i>arriskatu</i> 「危機に陥る」、 <i>atertu</i> 「(雨などが)あがる」、 <i>bukatu</i> 「終わる」、 <i>erasan</i> 「影響を与える」、 <i>esnatu</i> 「目覚める」、 <i>funzionatu</i> 「機能する」、 <i>gaineratu</i> 「頂上に着く、表面に出る」、 <i>garatu</i> 「芽吹く、発展する」、 <i>hasi</i> 「始まる」、 <i>hautsi</i> 「壊れる」、 <i>hobetu</i> 「より良くなる、向上する」、 <i>ilundu</i> 「夜になる、暗くなる」、 <i>indartu</i> 「力強くなる」、 <i>isildu</i> 「静かになる」、 <i>ito</i> 「溺れる、窒息する」、 <i>itsatsi</i> 「くっつく」、 <i>maitemindu</i> 「恋に落ちる」、 <i>mindu</i> 「痛みを覚える、酸っぱくなる」、 <i>nahasi</i> 「混ざる」、 <i>nekatu</i> 「疲れる」、 <i>sumindu</i> 「激怒する」、 <i>zatitu</i> 「分かれる、割れる」
達成動詞(3/59)	<i>ezkutatu</i> 「隠れる」、 <i>gastatu</i> 「消耗する」、 <i>zabaldu</i> 「広まる、開く(あく)」

表1から分かるように、状態動詞・達成動詞と活動動詞・到達動詞で大きな差が出たため、それぞれの組み合わせ(特に、用例の多かった活動動詞と到達動詞)に意味的に何らかの共通点がある可能性も考えられる。

意味という側面において、活動動詞23個を概観すると、目的語が動詞自体に内包されているようなものがある(*aparkatu*「駐車する」、*erre*「喫煙する」、*frenatu*「ブレーキをかける」など)。一方、高見・久野(2002: 18)によれば到達動詞は動詞が表す結果を示すものであり、動詞自体に結果が内包されていると見ることもできる。今回抽出された動詞の中でも *arriskatu*「危機に陥る」、*atertu*「(雨などが)あがる」、*ilundu*「夜になる、暗くなる」、*isildu*「静かになる」などは典型的なものだと考えられる。しかし、到達動詞を概観すると、他動詞としても用いることができそうなものも多い。そのため文脈から判断のできないコーパスにおいては、一概に目的語が必要ないと言うことはできない。

³ States(状態動詞)、Activities(活動動詞)、Achievements(到達動詞)、Accomplishments(達成動詞)の4分類。

⁴ 計515個の動詞が抽出された。

⁵ Ereduzko Prosa Gaur(以下EPG)を用いる。EPGは、総数約2500万語で、2000年から2007年にかけて出版された新聞や書籍のテキストが収録されている。

したがって、動詞そのものに目的語や結果の意味が含まれているものに関しては、自動詞のようであっても DU 助動詞が用いられ主語に能格が標示される傾向があると予想するが、アンケート調査で明らかにする必要がある。

2.2. アンケート調査 1

予備調査 2 では動詞の分類ごとに一定の差が現れた。そこで、<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文が本当に動詞の意味によって変化するのかを明らかにするために、予備調査 2 で得られた例文をもとにアンケート調査を行う。インフォーマント⁶には 18 個の例文について、対象となる動詞の直接目的語（絶対格で示される名詞句）が現れないことが、自然か不自然かを回答していただいた。

2.2.1. アンケート調査 1 結果

18 個の動詞についての回答は以下の表 2 の通りであった。

表 2: アンケート調査 1 結果

不自然である	<i>zabaldu</i> 「広まる、開く」、 <i>ibili</i> 「歩く、暮らす」、 <i>jaitsi</i> 「降りる」	3
自然である	<i>baretu</i> 「落ち着く」、 <i>distiratu</i> 「輝く」、 <i>izutu</i> 「おびえる、恐慌をきたす」、 <i>liluratu</i> 「魅力的である」、 <i>sufritu</i> 「苦しむ、悩む」、 <i>ezkutatu</i> 「隠れる」、 <i>gastatu</i> 「消耗する」、 <i>borrokatu</i> 「闘う」、 <i>dantzatu</i> 「踊る」、 <i>eztabaidatu</i> 「議論する」、 <i>jolastu</i> 「遊ぶ」、 <i>korritu</i> 「走る」、 <i>oihukatu</i> 「叫ぶ」、 <i>protestatu</i> 「抵抗する、反抗する」、 <i>tartekatu</i> 「介入する」	15

18 個の動詞のうち、大半の 15 個の動詞について自然であるという回答を得た。

2.2.2. アンケート調査 1 考察

今回のアンケート調査の結果、不自然と回答のあった 3 個の動詞については直接目的語が省略されている例であり、<名詞.ERG+名詞.ABS+自動詞+DU 助動詞>のいわゆる他動詞構文で用いられているものであると予想できる。一方アンケートの対象となった 18 個の動詞のうち 15 個については、直接目的語が無いにも関わらず能格および DU 助動詞が現れ、文として自然であるという回答が得られた。この点について、インフォーマントから次のようなコメントを頂いた。

- 1) バスク語では、日本語の「～する」のように、*-tu(-du)*をつけることで動詞を作ることのできる名詞が存在するが、そのように動詞を作る際には、他動詞/自動詞に関わらず DU 助動詞を用いる。
- 2) *-tu* を用いて動詞を作ることのできる名詞は借用語に多く見られる。

⁶ インフォーマントの情報を以下に示す。

性別：男性、年齢：24 歳、出身地：ナバーラ州イルーニャ、職業：学生

- 3) *distira* ‘brightness’ のようなバスク語固有の名詞の場合でも、*shine* / *brillar* という外国語に対応させるために *-tu* をつけて動詞を作り、結果的に DU 助動詞を用いるようになったのではないか。

活動動詞はその性質上、ある動作をする / 行うという意味を表していることが多いため、上記のコメントを踏まえると、DU 助動詞が多く現れることに説明がつく。また、<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文が借用された動詞に多く見られることにも説明がつく。

では、2.1.節で述べた、「動詞自体に結果が内包されている」とした到達動詞についてはどうなるだろうか。「目的語が動詞自体に内包されている」とした活動動詞に DU 助動詞を用いることに対してはある程度説明がつくが、動作ではなく結果に焦点が当たる到達動詞の場合はこの説明は当てはまらない。

2.3. アンケート調査 2

ここまでの予想・疑問を踏まえて、<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文が確認された到達動詞について再度アンケート調査を行う。到達動詞はその意味を考慮すると、名詞から作られた動詞であるとは考えにくい。インフォーマント⁷には、予備調査 2 で抽出した到達動詞が用いられている 22 個⁸の例文について、「動詞+DU 助動詞」が自動詞を意味しているか、他動詞を意味し直接目的語を必要としているかを回答していただいた。

2.3.1. アンケート調査 2 結果

23 個の動詞についての回答は以下の表 3 の通りである。

表 3: アンケート調査 2 結果

	動詞	合計
自動詞	<i>arriskatu</i> 「危機に陥る」、 <i>atertu</i> 「(雨などが) あがる」、 <i>bukatu</i> 「終わる」、 <i>funtzionatu</i> 「機能する」、 <i>hasi</i> 「始まる」、 <i>hautsi</i> 「壊れる」、 <i>hobetu</i> 「より良くなる、向上する」、 <i>ilundu</i> 「夜になる、暗くなる」	8
他動詞	<i>ahitu</i> 「尽きる、疲れ果てる」、 <i>erasan</i> 「影響を与える」、 <i>esnatu</i> 「目覚める」、 <i>gaineratu</i> 「頂上に着く、表面に出る」、 <i>garatu</i> 「芽吹く、発展する」、 <i>indartu</i> 「力強くなる」、 <i>isildu</i> 「静かになる」、 <i>ito</i> 「溺れる、窒息する」、 <i>itsatsi</i> 「くつつく」、 <i>maitemindu</i> 「恋に落ちる」、 <i>mindu</i> 「痛みを覚える、酸っぱくなる」、 <i>nahasi</i> 「混ざる」、 <i>nekatu</i> 「疲れる」、 <i>sumindu</i> 「激怒する」、 <i>zatitu</i> 「分かれる、割れる」	15

8 個の動詞についてのみ、DU 助動詞が現れても自動詞として用い、残りの 15 個の動詞はすべて DU 助動詞が現れると他動詞として機能するという回答が得られた。

⁷ アンケート調査 1 と同じインフォーマント。

⁸ 予備調査 2 で到達動詞は 23 個抽出されたが、同じ文で用いられているものがあるため、例文は 22 個である。

2.3.2. アンケート調査2 考察

インフォーマントによれば、気候について述べる際には例外的に、DU 助動詞が現れるにも関わらず動詞は自動詞として用いられる。また動詞自体は気候と関係なくとも、気候について描写する際には DU 助動詞が用いられる⁹。また *arriskatu*「危機に陥る」、*funtzionatu*「機能する」は、英語の“risk”“function”から予測できるように明らかに借用語であり、借用語をもとに作られた動詞であるために DU 助動詞を用いると考えられる。

問題は *bukatu*「終わる」、*hautsi*「壊れる」、*hobetu*「より良くなる、向上する」がなぜ<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文で現れるか、である。

インフォーマントによれば、これらの単語が DU 助動詞を伴って自動詞の働きをする場面は非常に限定される。以下にその用法をまとめる。

表 4: *bukatu*, *hautsi*, *hobetu* の用法

<i>bukatu</i>	動詞が <i>ongi</i> 「良く」 <i>gaizki</i> 「悪く」といった、状態を表す副詞と共に用いられる場合に用いられることがある。
<i>hautsi</i>	共格を用いて「人との関係が壊れる、縁が切れる」という意味を表す場合にのみ用いる。
<i>hobetu</i>	「(人が) 上手になる」という意味を表す場合にのみ用いる。

2.2.2.節のインフォーマントのコメントを踏まえると、このように<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文が用いられる場面が非常に限定されるという現象は、外国語から意味が借用された結果として生じていると考えられる。それぞれの動詞はもともと辞書に載っているような「終わる」「壊れる」「改善する」という意味しか持っていないが、外国語の表現に合わせて（例えば英語やスペイン語には *break with...* / *romper con...*「...と関わりを断つ」、*improve in...* / *mejorar en...*「...が上達する」という表現がある¹⁰）新たな意味を表すようになり、そのような場合に<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文を用いるようになったのではないだろうか。

3. 考察

結果的に、<名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文で使用するこのできる自動詞として考えられるものは 36 個あった。以下の表 5 に示す。

⁹ ここでは *hasi*「始まる」が該当した。

¹⁰ ウィズダム英和辞典第 2 版およびクラウン西和辞典を参照した。

表 5: <名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞>の構文で現れる動詞

借用語から作られた動詞	<i>arriskatu</i> 「危機に陥る」、 <i>aparkatu</i> 「駐車する」、 <i>dantzatu</i> 「踊る」、 <i>datatu</i> 「日付を記す」、 <i>elikatu</i> 「栄養を摂る」、 <i>ezkutatu</i> 「隠れる」、 <i>frenatu</i> 「ブレーキをかける」、 <i>funtzionatu</i> 「機能する」、 <i>gastatu</i> 「消耗する」、 <i>jolastu</i> 「遊ぶ」、 <i>korritu</i> 「走る」、 <i>negoziatu</i> 「交渉する」、 <i>operatu</i> 「手術する」、 <i>protestatu</i> 「抵抗する、反抗する」、 <i>sinatu</i> 「署名する」、 <i>sufritu</i> 「苦しむ、悩む」
外国語の意味が付加された動詞	<i>baretu</i> 「落ち着く」、 <i>bazkaldu</i> 「昼食をとる」、 <i>borrokatu</i> 「闘う」、 <i>bukatu</i> 「終わる」、 <i>distiratu</i> 「輝く」、 <i>erre</i> 「喫煙する」、 <i>eztabaidatu</i> 「議論する」、 <i>galgatu</i> 「ブレーキをかける」、 <i>gosaldu</i> 「朝食をとる」、 <i>hautsi</i> 「壊れる」、 <i>hobetu</i> 「より良くなる、向上する」、 <i>izutu</i> 「おびえる、恐慌をきたす」、 <i>liluratu</i> 「魅力的である」、 <i>musukatu</i> 「繰り返しキスをする」、 <i>tartekatu</i> 「介入する」、 <i>oihukatu</i> 「叫ぶ」、 <i>zentzatu</i> 「自分を律する」
気候に関わる動詞	<i>atertu</i> 「(雨などが) あがる」、 <i>ilundu</i> 「夜になる、暗くなる」、(<i>hasi</i> 「始まる」)

以下はそれぞれ、「借用語から作られた動詞」「外国語の意味が付加された動詞」「気候に関わる動詞」を用いた例である。

(2) *Normalki, oso ondo funtzionatzen du sistemak.*
 normally very well work.IPFV DU.AUX.ERG:3SG.ABS:3SG system.ERG
 「システムはいつもとても良く作動している」 (Lenihan Aldasoro 2006: 194)

(3) *Gaizki bukatuko du honek guztiak.*
 badly end.FUT DU.AUX.ERG:3SG.ABS:3SG this.ERG all.ERG
 「すべてが悪い結果に終わった」 (Zola and Zabala: 2004: 330)

(4) *Atertu zuela zirudien.*
 cease.PFV DU.AUX.PAST.ERG:3SG.ABS:3SG-ELA it seems-EN
 「雨はあがったようだ」 (Iñaki Zabaleta 2003: 165)

したがって、今回の調査を踏まえた上で、「バスク語の自動詞文において能格が現れる条件」に対する答えとして以下の2点を挙げる。

- 1) 自動詞文でも、動詞が借用語から作られた場合には、主語に能格が現れる。
- 2) 自動詞文でも、動詞の意味が外国語に対応したものである場合には、主語に能格が現れる。

気候に関わる動詞については、その意味から主語が現れにくいと判断したため、能格が現れる条件としては不適切である可能性を考慮して上記2点には含めなかった。

4. まとめと今後の課題

本稿ではバスク語において、〈名詞.ERG+自動詞+DU 助動詞〉の構文がどのような条件で現れるのかを検証してきた。この構文において借用語が用いられることが多いということは先行研究でも言われていたことだが、外国語から意味を借用した場合にもこの構文を用いるということが新たに分かった。

しかし、アンケートで用いた例文自体がコーパスから抽出したものであるため、今回最終的に挙げた 36 個以外の動詞について、この構文で用いることができないと言うことは危険である。またバスク語は方言差の大きい言語であるが、アンケート調査を実施することのできたインフォーマントは 1 名のみであったため、3.節の表 5 で挙げた基準がすべてのバスク語話者に当てはまると断言することもできない。

今後は、調査範囲を広げることや精度を上げることを課題として、引き続き調査に取り組んでいきたい。

略号一覧

3rd person 3 人称 / ABS absolutive 絶対格 / AUX auxiliary 助動詞 / ERG ergative 能格 / FUT future 未来 / IPFV imperfective 不完了分詞 / PFV perfective 完了分詞 / SG singular 単数

参考文献

外国語で書かれた文献

Alberdi, Xabier. (2003) The transitivity of borrowed verbs in Basque: an outline. *Inquiries Into the Lexicon-Syntax Relations in Basque*, 23-46. Bilbao: Universidad del País Vasco. / Dowty, D. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel. / Hualde, José Ignacio and Jon Ortiz de Urbina. (2003) *A Grammar of Basque*. Berlin: Mouton de Gruyter. / King, Alan R. (2012) *The Basque Language*. Reno: University of Nevada Press.

日本語で書かれた文献

原誠・エンリケ=コントレーラス他 (2005) 『クラウン西和辞典』 東京：三省堂 / 井上永幸・赤野一郎 (2008) 『ウィズダム英和辞典』第 2 版 東京：三省堂 / 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文：生成文法分析の批判と機能的解析』 東京：研究社 / 田村すず子 (1992) 「バスク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第 3 卷』 151-162 東京：三省堂 / 吉田浩美 (1992) 『バスク語常用 6000 語』 東京：大学書林 / 吉田浩美 (2001) 『バスク語アスペイティア方言の主要な動詞述語に関する記述的研究』 東京大学博士学位論文 (未公刊)

調査資料

Ereduzko Prosa Gaur: <http://www.ehu.eus/euskara-orria/euskara/ereduzkoa/> (最終閲覧日 2015/12/06)